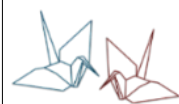


未来に向かって伸びる鶴嶺の子

鶴小だより 10月号

茅ヶ崎市立鶴嶺小学校
校長 日高 大司郎
令和6年10月1日発行



自分に向き合える子どもを..

私事になりますが、先日長男が結婚するという相手を家に連れてきました。息子が、相手のことを気遣ったり、入籍はいつで、いつから一緒に住むかなど話している姿を見て、僕は「ほんとうに、よかったなあ」と安堵の気持ちを抱きました。それは、結婚が決まってということではありません。

それは、一通の手紙から始まりました。長男が通っていた大学からのものです。「退学勧告書」と手紙の表題には書かれていました。訳が分からず、大学の担当者に連絡をすると、「出席せず、単位もほとんど取れていないので、お子さんとよく話し合って、継続するのか否かを考えて欲しい。」とのこと。僕は、「どうということなんだ!」と怒りを感じました。単位が取れていないだけならまだしも、行っていないって・・・と思ったのです。

息子に問いただすと、「行かなきゃ、行かなきゃ」と思っているのだが、なかなかうまくできない、朝も起きられない、とのことでした。昔から朝が苦手で、高校時代もぎりぎりに自転車をとばして通学していた子でした。だからその時の僕は、いい加減な息子の「さぼり」だろうとしか考えていませんでした。本人に、「大学を出たとか、出ていないとかはどうでもいいことだし、世間体がどうとかも全然気にしないから、やめれば?！」と問うと、「いや、大学は出ておきたいから、がんばるので続けさせて欲しい。」と言います。かかっているお金のこと伝えて、しっかりしろと発破をかけました。

息子の大学は、片道2時間以上かかる距離でした。娘は、駅前の祖父のマンションを借りて1人暮らしをはじめていたので、通学が少しでも楽になればとそのマンションに住まわせることにしました。けれど、ほとんど同じような状態で、変わることはなかったのです。成績表が届いても、単位がほとんど取れていません。

改めて、本人の気持ちを聞きました。同じ事を繰り返しているの、口調もきつくなります。息子は、泣きながら「大学に行く、通う、卒業できるようにする。」と言います。何度もやめた方がいいと伝えましたが、結局、そのまま在学することになりました。

かみさんは、息子のためにと学校の近くのアパートを借りる算段をしました。学校まで10分ほどの好立地です。少しくらい、寝坊しても十分登校できるはずです。そして、何よりそのために僕も、かみさんも、兄弟も協力して、その準備をした

り、引っ越しを手伝ったりしました。きっと本人にも、家族が心配していること、自分のために力を尽くしていることが伝わったはずですが、僕はどこかで、きつとうまくいかないなと思っていました。そんな、物理的な距離の問題ではないだろうと思っていたからです。

案の定、結果は同じでした。大学の先生も交え話をし、彼に時間を与えることにしました。そう、休学です。自分のことをしっかり考えて、自分で決めるように伝えました。決まったら、それを応援するとも言いました。復学して卒業できるぎりぎりのところで、息子は退学を選択しました。休学中も退学後も、フルタイムのアルバイトをずっと続けました。そして、自分でやりたい仕事を見つけ、昨年今勤めている会社に就職しました。

大学に行けない間、息子は様々な事を考えていたはずですが、それは端から見たら、ただだらだらしているだけと映ったかもしれない。何にも考えていないと感じられたかもしれない。でも僕は、できない自分、頑張れない自分を責めて、きつとつらかったのだろうと思っています。自分はダメだ感じていたはずだと、苦しかったはずだと考えます。この、否定的な自己認知(こういう言葉があるか分かりませんが)は、沼のように這い上がるのを難しくさせるのだと考えます。

僕は、自分の考えを伝えることを心がけていました。〇〇しろ、しなさいではなくて、僕はこう思うよという形でいつも話します。選択するのも、決定するのも息子です。そして、現状については、心配でたまらないけれど、生活の中で十分つながりながら、否定せずに見守りました。ただこれだけです。これしかできなかったという方が正確かもしれません。息子の人生は彼のものであって、僕のものでも、僕が管理するものでもありません。結局のところ、変えられるのは息子自身だけなのです。そう自分に言い聞かせながら、随分長い時間を過ごしました。

「もう少しで、就職できて1年になるから、このタイミングで入籍しようと思うんだ。やっぱり1年勤めた実績がほしいし・・・。」冒頭は、息子が自分自身に向き合って、自分のことをしっかり考えられるようになったことへの安堵だったので、僕たち親は、自分の足で立てる子どもを、自分にきちんと向き合える子どもを育てなければなりません。どんなに心配しても、どんなに手を尽くしても、子どもの人生はその子の人生であり、その子自身が切り拓く以外はないのですから。